感覚間協応を軸とした表現及び鑑賞活動の教材開発と教育効果に関する研究

青木　良夢(22001)

1.　はじめに

本研究にいたる問題意識として、まず１つに美術教育での表現と鑑賞の活動における隔たりがあげられる。平成 29 年度の指導要領改訂を受け、表現と鑑賞の一体化が謳われ中学校現場でも活動の改善が行われているところである。しかし現状として、表現と鑑賞の活動の間には未だ断続性があり、鑑賞の活動自体が形式的で断続的な内容の関連に留まっていることや、鑑賞作品が表現するための参考作品として位置づけられている実態がある。次に中学生の美的価値観が視覚優位に偏っている実態である。教育実習における中学生の観察を通して、中学生の理想とする作品の価値観が視覚優位に偏っていることが見て取れた。しかし美術教育の研究者であるローウェンフェルドの研究により、絵の描き方には「視覚型」と「触覚型」の２タイプがあることが明らかにされていることを踏まえるならば、表現活動には視覚だけでなく、感覚、身体など、五感や感情などあらゆる要素を含めた総合的、身体感覚を使った表現活動を取り入れる必要性があると考えた。指導要領の表現・鑑賞活動における共通事項である「造形的な視点」において、自分なりのものの見方や価値観で事物を捉え、知覚することを育むことが求められている。ある程度共通で認識できる視覚の世界が、活動における一種の正解になってしまうことで、個人の自由な表現の足かせになってしまう可能性を感じた。造形に対して自分なりのものの見方や価値観を見つめていく過程において、視覚優位な造形の捉え方だけでなく、様々な価値観へと広げる活動が美術教育には求められると考える。

2.　研究の目的

本研究では中学校美術科において「音を描く」活動を題材にした実践授業を行い、その学びの可能性と教育的意義について検証し、表現と鑑賞が相互に作用しあう授業のあり方について考察していく。あらゆる感覚を総合してイメージを作り上げていく表現プロセス、つまり感覚間を協応させながらイメージを作り上げていくプロセスにおける体験型表現活動及び鑑賞活動を考案し、これらが相互に作用しあう複合的な授業づくりを目指していく。従来の鑑賞活動における画家の作品を対象とした授業から、自らの表現そして他者の表現との違いや良さを味わう活動に重点を置くことで、表現と鑑賞の活動の間に連鎖的な相互作用が生まれ、美術的な見方・考え方に深まりを持つ効果を期待するものである。また、視覚優位な活動がもたらす「上手い下手」の価値観を越境し美術本来が持つ表現の豊かさを実感できる題材としての有効性を検証していく。従来の授業にはなかった即興、直感で描く表現プロセスが、生徒が自己の表現を見つめていくうえでの足場かけとして有効であるか、生徒の作品及びワークシートを基に考察を行うものである。

3.　研究方法

①文献調査による理論研究
②実習校における授業参観に基づく授業構想
③美術科教員との協働による実践研究

4.　研究成果

(1)1 回目の実践授業の実態(大学院一年次)

1 回目の実践授業の概要

題材名	「音を描く～五感でとらえる美術～」
対象	第 2 学年(1 クラス)36 名
場所	(1 時間目)音楽室/(2 時間目)美術室
日時	2023 年(1 時間目)12 月 12 日/(2 時間目)12 月 13 日
材料	(導入)カラーペン/(展開)水彩絵の具

実習校第 2 学年(1 クラス)において「音を描く～五感でとらえる美術～」を題材とした 2 時間続きの授業実践を行った。本題材では、楽器を即興で奏でながら「音会話」を録音し、その音をモチーフに浮かび上がる色や形などのイメージを描いていく。なお表現材料は水彩絵の具を採用し、モダンテクニックに関する指導を行った。

本授業での生徒作品から、音の感じ方にはそれぞれ個性があり、作品として出来上がった表現はいくつかのパターンで分類できることがわかった。まず、音源の聴

き方として①音源全体の雰囲気をイメージとして捉える。②混在する音の中で気になった音を捉える。またそれらを表現として起こす際、A 音を動きとして捉える。B 静止した物体として捉えるというものがあった。制作中、生徒に表現の意図を訪ねた際の対話から作品を分析していく。例えば、生徒 a の作品(図1)では、「音源の始まりと終わりに注目し、様々な音が中盤にかけて増えていき、混ざり合って流れていくイメージを筆圧や混色の変化で表現した。」この発言から生徒 a は、①-A の感じ方をしていると捉えることができる。一方での生徒bの作品(図2)では、「ここの部分が面白い。(音源を聴いて示しながら)一番目立つ音はこれ。(作品の赤い部分を指しながら)その周りの雑音はこの部分かな。(作品の青い部分を指しながら)」と話しており、自身が気になった音を部分的に捉え、個々が合わさった風景として表現していることから、②-B の感じ方で表現していると考えられる。

図１

図2

音源の聴き方	音の捉え方
①音源全体の雰囲気をイメージとして捉える	A 音を動きとして捉える
②混在する音の中で気になった音を捉える	B 静止した物体として捉える

こうしたことから、視覚的な表現活動であるデッサンでも、関係性から全体の形を捉えて描く視点、モチーフの個に着目し細部や物の中身を描いていく視点とあるように、音という時間の概念がある要素を描くという活動のなかにも、全体と個々の視点があることがわかる。デッサンのような視覚的な表現と違うのは、そこに明確な正解が存在しないことである。今回の実践を通して、音という目に見えないものを描く活動においても、多様な視点や捉え方が存在することが見えてきた。

(2)2 回目の実践授業の実態(大学院2年次)

2 回目の実践授業の概要

題材名	「音の存在をあきらかにしよう」
対象	第3学年(4 クラス)
場所	音楽室
日時	2023 年 7 月 19 日･20 日/9 月 20 日
材料	(導入)ボールペン/(展開)クレヨン

1 回目の実践を踏まえ、新たに「音の存在をあきらかにしよう」を題材とした授業を考案し、実習校第３学年において実践を行った。本時では、自分なりの見方でイメージを膨らませながら音を捉え、個々の感じ方・表現の違いや美しさを味わうことを主体としている。また今回は、「音を描く」という活動の中における即興性・直感性で描く表現プロセスの体験に視点を置き、授業作りを行った。導入では「音を分析する」とし、音の存在をあきらかにすることを起点に、まずは線やタッチなど、音を視覚的に置き換える感覚を段階的に掴んでいった。音を描くためのヒントになる視点を、「動き」「変化」「質感」の 3 つに分け、活動を行った。音の動きを捉える活動では、左右上下に動き回るジェット風船を教室の中心から放ち、その軌道を、音をたよりに線で描く。次に音の変化を捉える活動では、授業者がエレキベースを実際に弾き、スライド(フレット間で指を滑らせ音を出す奏法)やハンマリング(フレット間の弦を叩く奏法)で音程の変化を作り出し、その変化に合わせて線を描いていく。音を鳴らし終えた後、自分の線と友達の線を見比べてみるよう指示し、自身と他者の線の違いに関心を向けるよう促した。最後に音の質感を捉えていく過程では、3 つの違う音を聴いて、それぞれから感じる音色の質感を描いていく。ベースの音にエフェクトをかけ、リバーブ(残響効果)とワウ(周波数帯が変化する効果)がかかったような音や、砂嵐のような音などそれぞれ特徴の違う 3 種類の音を用意した。音の種類ごと合間に簡単な鑑賞時間を設け、自己と他者の表現の違いや良さに触れるよう声掛けを行った。導入後の展開では、単体の音から複数の音になった時のイメージの変化や、他者と自分の音の捉え方、どこをどう聴くかといった聴き方の違いについて、表現・鑑賞を通して実感していく。今回は表現活動の際の道具としてクレヨンを採用した。絵の具と比べ準備や片付けが簡単であることが大きな理由であるが、本授業で主軸としたい「即興・直感」の感覚をより引き出すために、頭でイメージした線や色彩をすぐに描くことができるようにしたいという思いがあった。また描く音源について、今回の活動では「John Cage - Sonata V 」という演奏動画を鑑

賞した。前衛音楽のようなこの音源は、普段生徒たちが「音楽」として聴いているものとは異質であり、馴染みのないものである。この馴染みのない独自性が、音の出どころや楽器の姿など映像的な情報に引っ張られずに、「音」そのものを描く感覚に近づけることができた1つの要因であるように思われる。独特な音色やリズムから得られる奇妙な魅力、不思議な感覚が色・線のイメージへと広がっていくことに寄与した可能性がある。制作中、数名の生徒に作品における線や色彩の意図、音に対する印象を聞くことができた。生徒Ａでは「独立した音がたくさんあるイメージ。太鼓みたいな音がくるくると螺旋を描くように鳴っている。そこに流れるようなピアノっぽい音が、水のようなイメージがある。どこかインドのような雰囲気を感じる。」というイメージから以下のような作品となった。(図3)螺旋状に表される「太鼓のような音」の部分と「水のようなイメージ」が1つの風景として描かれている。また、生徒Ｂでは「明るい音と不気味な音が入り混じってなんだか怖い。黒色で音の流れをたどった。沈むような音になっている部分で、複数の違う音が混じるので他の色も足している。」といった発言から以下の作品となった。(図4)こちらでは時間経過における音のイメージが印象的に描かれている。また色彩で自身の感じた雰囲気を表現しようとしている様子がうかがえる。

図３

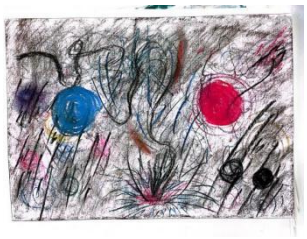

図４

音に対するイメージを色彩のある線や形で描こうとしたとき、時間経過を印象的に描く生徒と全体の印象を情景的に描く生徒の大きく分けて2パターンに分かれることが考察できる。こうした点も踏まえ計3クラス分の実践を経て集まった生徒の作品を、いくつかの観点から分類することができた。(図5)図に表記する「抽象的」に分類されるものは、彩色された円などの形や線といった幾何学的な形態が主に描写された作品である。また「具象的」とされるものは、名前を持った具体的なもので構成された作品を指すものとしている。「半具象的」とは具体的な形態を成しながらも、その彩色や形状において作者独自の世界観においてデフォルメされたものを指している。なお、それぞれの項目に分類される生徒作品を図として提示している。(図6)

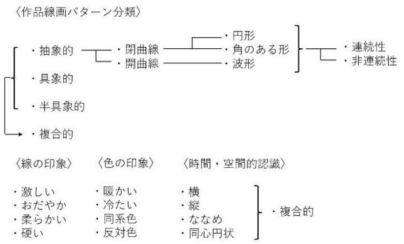

図５

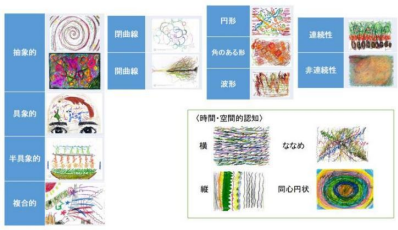

図6

以上のように線画パターンには様々な物が見られ、その組み合わせに関しても非常に複雑であり多様な表現が見られた。音という視覚情報のない対象を描くことで、描き出される線にはそれぞれの経験や記憶に基づく様々なイメージが反映されると考えられる。ここで描写されるものは、絵の作者独自の象徴主義的な色彩論・形態論にもとづいて描かれていると考えられる。つまり、作品に描かれた色彩・線に対する理由付けが作者自身の実感にもとづくものとして表現されている。生徒それぞれが持つ音に対しての実感が、色彩・形態として作品に現れていく。その過程に鑑賞の時間が入ることで、自身と他者の実感の間に、共通性や差異を感じることができる。個人の世界観に他者の表現が介入することで、個々の色彩論・形態論はさらに広がりを持ち、新たな表現へ繋がっていったものと考えられる。

生徒の「考えたこと」からは、音を絵で表すことに難しさを感じながらも、他者との表現の違いに関心を持った生徒が多かった。「音を色や形で表現するのは耳と頭と目と手がつながったみたいで楽しかった。」という声もあり、普段絵を描く時の感覚とはまた違った表現の感覚を実感した生徒も見られた。一方で生徒の一部では、「音を絵というもので表現するのはとても難しかった。普段音楽を勉強していることもあり理論的に考えてしまうので難しかった。」という感想もあり、音楽に対する知識が深いほど絵として表現することに抵抗を感じる傾向があること

も見えてきた。今回は1時間の授業構成であったが、数回にわたり時間をかけ「音」からイメージを膨らませる手だてを行っていくことで、生徒から生み出される表現はさらに豊かなものになっていくのではないかと考える。

5.　考察

「音を描く」ことを題材とした２つの実践授業を経て得られた成果について考察していく。 まず、１回目の実践授業では、表現の源となるイメージを「場」や「経験」から得ることに重点を置いた。活動の中で楽器に実際に触れることで得られる感触、身体的な動きやエネルギー、リズム、それに呼応した「音」の響きや心地よさといった体験的かつ体感的な味わいから、複合的に「音」のイメージを獲得していくことをねらいとした。「音会話」で成されるセッション的な音の呼応を通して、音楽活動で感じられる特有の「感覚」が内面世界の情景として生徒たちの中で形成されていく。こうした「場」の経験から得られたイメージは、録音した音源を聴くことで回帰され、生徒たちは感覚から得られたイメージを、何度も自身の中で解釈する。絵を描く行為そのものが音とリンクしていくように、音を奏でるようにして表現活動が行われていた。自分たちが生み出した音を対象とすることには、評価の様式を伴わない。この活動における作品の評価や価値づけの様式は、生徒達がその絵をどう見て、周りにどう影響を与えるかといった、「場」によって形づくられていく。生徒達が表現、鑑賞を繰り返していく中で価値を互いに見出すことで、既存の様式にとらわれない全く新たなアートワールドが教室に醸成されていくのである。教師は生徒に、その価値づけに必要な視点を与えながら、場に形成されたそれぞれの「見方」について評価を行っていくことができるのである。視覚的な共通認識の存在しない「音」を源としているからこそ、「視覚的リアリティ」に偏った絵画表現とは異なる、魅力的な活動になりうるように思える。その点からすると、今回の授業において、生徒が「どこまで深く音楽活動を味わい、堪能できたか」という部分は、音楽科を含めた「表現領域」全体で包括的に授業を形づくっていく、今後の可能性を感じる実践であったと捉えられる。2回目の実践授業では、ここからさらに「音を味わうこと」により重点を置いた。音を3つの視点に分け、音を聴いた後すぐ即興、直観的に描写することを繰り返すことによって「聴く・描く」の境界が融和していく。さらに鑑賞と表現を同時並行して行っていくことで、言語表現、あるいは言葉にならない感覚を互いに共有しあいながら「味わい」の多様性を認識していく。生徒たちは、言葉だけでなく自らの表現、作品によって「対話」をすることで、自己と他者の表現を見つけ、深めていったと考えられる。「音を描く」活動は、音楽的解釈を踏まえた自分なりの「楽譜＝記録」を描き出すことではなく、それぞれの「音楽の味わい方」を自己の表現を通して楽しむことに重要性があった。それを可能にしたのはまさに、即興、直観による表現プロセスであり、自己の表現を見つめていく上での足場かけの役割を果たしたことが示唆される。以上、2つの実践授業をまとめると、生徒たちは「表現しながら鑑賞すること」と「鑑賞しながら表現すること」を同時に体験し、鑑賞と表現とが相互に作用しあうことで、それぞれの「造形的な視点」「自分なりのものの見方」に深まりが生まれていった。感覚領域を超えた「聴覚と視覚」の実践は、「よさを味わう」美術科の目的において、「感じ方」と「表し方」の幅に広がりもつ表現活動の本質をとらえたものであったと考察する。生徒たちは表現することを通して、自ら感じていたことを自覚化していくことや、他者との共有を経て、違いを認識し、互いに認め合うことができていたと考察される。活動を経て、生徒たちの感性が「セッション」するようにして惹き立て合う「場」の空気が醸成されていたことを、本実践授業の意義として考察する。

引用・参考文献

1) 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　美術編　文部科学省
2) 干場良光 (2019) 総感覚で描く絵―幼児の絵と成人の絵の共通性のデータと考察―　國學院大學北海道短期大学部紀要 36 巻 p. 55-74
3) 奥村高明 (2010) 子どもの絵の見方: 子どもの世界を鑑賞するまなざし 東洋館出版社
4) V.ローウェンフェルド(著者)竹内清・武井勝雄・堀ノ内敏(翻訳) (1995) 美術による人間形成―創造的発達と精神的成長 黎明書房
5) 本江邦夫 (2003) 中・高校生のための現代美術入門 ： ○△□の美しさって何? 平凡社

宮城教育大学大学院高度教職実践専攻　実践研究論文（令和４年度）

感覚間協応を軸とした表現及び鑑賞活動の教材開発と教育効果に関する研究

青木　良夢（22001）

要旨　本研究では中学校美術科において「音を描く」活動を題材にした実践授業を行い、その学びの可能性と教育的意義について検証し、表現と鑑賞が相互に作用しあう授業のあり方について考察していくものである。従来の鑑賞活動における画家の作品を対象とした授業から、自らの表現そして他者の表現との違いや良さを味わう活動に重点を置くことで、表現と鑑賞の活動の間に連鎖的な相互作用が生まれ、美術的な見方・感じ方に深まりを持つ効果を期待するものである。また、視覚優位な活動がもたらす「上手い下手」の価値観を越境し美術本来が持つ表現の豊かさを実感できる題材としての有効性を検証していく。従来の授業にはなかった即興、直感で描く表現プロセスが、生徒が自己の表現を見つめていくうえでの足場かけとして有効であるか、生徒の作品及びワークシートを基に考察を行うものである。

Key words:　美術科教育、音、描写、表現、鑑賞

ユニット指導教員（◎ユニット長，〇副ユニット長）
◎香曽我部琢・虎尾裕・木下和彦・平垣内清